

昭和三十四年七月二十五日
第三種郵便物認可
発行(毎月一回・十五日発行)

(通一八二号)

慈光

第十六卷

第六号

目次	目
「教行信証」欲生釈(五)……………	近角常観……………(1)
善財童子の求道……………	福島政雄……………(4)
随時随想……………	柳瀬留治……………(11)
心の底にのこる言葉……………	福田鉄雄……………(14)
さるべき業……………	松村繁雄……………(16)
仏語を聞くところ……………	花田正夫……………(19)

「教行信証」 欲生釈 (五)

近 角 常 觀

次には

「觀經義に、道俗時衆等、おのおの無上心をおこせども、生死はなほだいとい難く、仏法またよろこび難し。ともに金剛のころさしをおこして、横に四流を超越せよ。まさしく金剛心を受け、一念に相應してのち、果として涅槃を得む者、といえり。(抄要)

又云く。真心徹到して、苦の娑婆をいとい、樂の無為をねがいて、永く常樂に帰すべし但し無為の境、輕爾として即ちかなうべからず。苦惱の娑婆、輒然としてはなることを得るに由なし。金剛のころさしをおこすにあらざるよりは、永く生死の元を絶むや。若しまのあたり慈尊にしたがいたてまつらずば、なんぞよく斯くのながきなげきをまぬかれむと。

又云く。金剛と言うは、即ち是れ無漏の体なりと已上「觀經義」は善導大師の「觀經」の註釈である。上の二河の譬喩を初め、先程の御文も、皆この註釈の御文から出てくるのであります。

「道俗時衆等、各無上心を發せども、生死甚だ厭い難

く、仏法また欣び難し」

道俗時衆等は、僧も俗も総ての者がである。総ての者が、無上心、——無上心は即ち上求菩提、下化衆生の無上菩提心のことである。即ちこの世を捨て、淨土に行かんならんと力む發菩提心である。其の菩提心を發せども、生死甚だ厭い難く、仏法また甚だよろこびにくい。

「共に金剛の志を發して、横に四流を超越せよ」

金剛の志とは、即ち其処で仏が廣大の慈悲を以て、其の厭穢穢土、欣求淨土の心無き者を哀れみ下さる。その遣る瀬なきお心を聞かせて貰つて、其の一念に、共に金剛の信を發起し、横に四流を超越せよである。「横」は、即ち我々が仏の御見捨てなきお心を聞かせて貰つて、迷いの根切れをさせて頂くは、一つ宛順々に善くなりて生死の迷いを絶たして貰うのでない。一つ宛順々に悟つて往くは、緊の法にて、即ち自力の道である。処が他方は信の一念に、一遍に生死を絶たせて頂くのであるから、即ち横である。「超断」は、今の漸々にゆくのなら超断でないが、処が他方は我々が人生における五分五分を横合より仏のお慈悲

えり」

このお言葉を「和讃」にお示し下されては

「釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し

われらが無上の信心を 發起せしめたまいけり。」

とある。即ち我々にお見捨てなきお慈悲一つを知らせんために、釈迦弥陀二尊が、慈父母となりて、種々に善巧方便をして下されたという御示しである。而してその次の「和讃」に今の御言葉が仰せられてある。

「真心徹到する人は 金剛心なりければ

三品の慚悔する人と ひとしと宗師はのべたまう」

即ち真にお慈悲の届いて下された一念が、真心徹到であります。而して一度そのお慈悲が届いて下さると、我々自分で苦の娑婆を厭の、樂の無為を欣ぶのと、そんな心の生ずる我々では無けれども、その廣大のお慈悲を知らされず、このお慈悲ならではと、世の中を厭い、極樂を願う心を生じ、永く常樂に帰せさせて頂くことが出来るのである。

「但し無為の境は、輕爾として即ち階うべからず、苦惱の娑婆は輒然として離るることを得るに由なし」

去りながら、この極樂無為の境界は、我々自分としては輕ろ／＼しく容易に昇れる階段じゃ無く、苦惱の娑婆は手易き事で捨てらるる我々じゃない。

に引つ取られ、今までの五分五分が一遍になくなるのであるから、横に四流を超越するのである。「四流」とは、四暴流と言つて、欲暴、有暴、見暴、無明暴と、この四つを言う。要するに三界の迷いのことを言うのであります。而して、

「正しく金剛心を受け、一念に相應して後、果として涅槃を得ん者と云えり」

斯くて五分五分の無くなつた者は、正しく金剛の信心を受け、お見捨てなき廣大のお慈悲に一念に有難やと相應して、涅槃の妙果を得る、とであります。

次には

「又言わく。真心徹到して苦の娑婆を厭い、樂の無為を欣んで永く常樂に帰すべし」

これは非常に有難き御文であります。真心徹到は、我々がこの世で五分五分で悩み苦しんでおる。その私の五分五分を、飽くまで哀れみお見捨てなき廣大のおまことが、真に私の胸中に徹到して、その廣大の御親切に頭の下つた一念が真心徹到である。昨年拝読した処の善導大師の御文には「又云わく。敬うて一切往生の知識等に白さく、大に須く漸愧すべし。釈迦如来は実にこれ慈悲の父母なり。種々の方便を以て、我等が無上の信心を發起せしめたま

「金剛の志を発すに非ざるよりは、永く生死の元を絶たんや。」

然るに、斯く我々、このたび生死の元を絶ち、涅槃のさとりに行くことの出来るのは、全く自力で叶う事じやない。大悲のお手許より、遣る瀨なき誓願の繩を下ろして、此の者を引き揚げて下さる広大なる仏智の不思議により

「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をばとくるなりと信じて、念仏もうさんと思ひ立つ心のおこるとき、即ち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり」

其の一念に開發させて下さる金剛心の働きによるのである。

「若し親しく慈尊に従いたてまつらば、何ぞ能く斯の長歎を免れん」

若し不幸にも弥陀釈迦の二尊の慈父母に値い奉らずば何ぞ苦海沈淪の永劫の歎きを免れようぞ、と。善導大師にはかくの如き敬虔なる啓白のお言葉が多いのであります。

「和讃」の御教化には又ここを

「弘誓の力をかがらずば はずれの時にか娑婆を出でん 仏恩深くおもいつゝ、 つねに弥陀を念ずべし。

娑婆永劫の苦をすてて浄土無為を期すること

本師釈迦のちからなり 長時に慈恩を報ずべし」

又次には

善財童子の求道

家庭問題

十番目の瞿夷女くわいによというのは何になりますかというのと、私、註釈によつて初めて知つたのでありますが、お釈迦様の在俗時代、悉多太子時代の第一夫人であります。そのうであります。私共のよく聞いておりますところの耶輸陀羅夫人やしゆたらは第二夫人である。そして第三夫人に摩奴舌まぬしやという人があつたと註釈を見ますと、こう云つてあります。とにかく釈尊の御夫人である。その瞿夷女が十地の位の十番目法雲地ほううんちという位の、非常に大事なことを代表する善知識である。こうなつてまいりますからして、ここで私、考えさせられます問題が家庭問題となる。私共がこの世に生きていて一番むつかしいのは、何処かとなると、それは社会に仿いてめいめいむつかしい問題もありましようけれども、然し実はこの家庭問題というものが一番むつかしいということを知つておりますし、私を非常に可愛がつてくれました伯父なんかも、家庭で、それをよく治めて、自分の妻、或は子供、それをよく取り扱うことが出来るようになったら、そ

「又言わく。金剛と言うは、即ちこれ無漏の体なり」
我々の心中に有難やと頂く一念の信心は、我々の四大五陰の穢き体中に頂く信心なるも、其の心は是れ無漏の信心である。仏のお心が我々の貪瞋煩惱の為に犯され穢さる事無い。故に即ち金剛である。而してこれからが、三信釈の結末の有名なる御文になるのであります。それは弥々最終の講席として次席に申し述ぶ事と致します。

(夏季求道会 第七日 第一席)

幸福

ヘルマン・ヘッセ

幸福を追いかけている間は

おまえは幸福であり得るだけに成熟していかない

たとえ最愛のものが、おまえのものになつたとしても

幸福、幸福と、言いたてなくなつたとき

そのときはじめて、できごとの流れがもはやおまえの心に迫らなくなり、おまえの魂はおちつく。

○

ふるさととはどこかよにあるのではなく、その人自身の中にあり、救いの道は右にも左にも通じているのではなくその人の心の中と通じている。

福島政雄

したらこの他の世界のことは非常にみやすい、と伯父が私に申してくれたことがあります。

それから孔子の教えの方を見ますと、例の「大学」という經典には、修身齊家、自分の身を修めて、自分の家をととのえろというようなことが最初のことで、それがよく出来たら治國平天下というようなことで、國を治め、天下を平らかにする、この世界に平和をもたらしというようなことも、家庭がよく治まつての上のことであるということ孔子の教の上ではいわれているのである。

どつちから云つても家庭というものが非常に大事なものである。そうすると家庭におけるお母さんが十地の九番目の善知識、それから夫人が十番目の善知識になるのは非常に尊いこと、お母さんのことはまだしもわかりますけれども、私共に見ますれば、自分の妻が自分のための善知識であるというようなことは、仲々わかりませんのであります。夫婦というものは両方から欠点、弱点がよく見える

ものでありますからして、段々永くなればなるほど、両方からこの悪いところが目についてくるもので、仲々うまく行かないものだということを私なんか感じますのであります。ところが善財童子の前には瞿夷女が善知識である。釈尊の求道の魂の前では、瞿夷女が非常に高い位を代表するところの善知識である。これが非常に私なんかの心にひびきますのであります。

瞿夷女の心境

そこで善財童子は今の瞿夷女にあうて、瞿夷女を敬い、礼をしまして、無上菩提の道をたずねるのであります。

この人間の世の中、生死の中、生き死にの中に行つて、すこしも心の汚れがなく、一切のことをすつかり、本当のすがたをさとつて、そして自分ひとりのさとればかりでないという境地に行つて、そして如来の境界まで行つて、しかも如来の境地まで行つても、しかも菩薩のおこないを捨ててしまふということをしなない。こういうことのためにはどうしたらいいのでありませうかと、善財童子は瞿夷女にたずねるのであります。

すると瞿夷女はそれにこたえて「知識にへつらわず、自分を教え導いて下さる人へつらつたりしない。そして知慧無量で、専ら仏果菩提を求め。ひとすじに仏のさとりを求める。そして諸々の衆生をたすけに行く」こういうよう

なことを瞿夷女の方で述べて、自分は、分別観察一切菩薩三昧海法門を成就していると、そういう答えてあります。

一切の菩薩の三昧でありますから、一切の菩薩の心の奥の奥までをしずめる有様をよく観察して、そういうことの出来る法門を成し逐けて居りますと、瞿夷女の答えてあります。その法門の境界はどうでありますか、その境界の味いはどうでありますかとたずねるのであります。その味いは娑婆世界の衆生の有様をよく知つて、それから色々の仏様がみ法をたたえたまう、法輪を転じ給う有様、それから大きな願いを満足したまうことを徹底して知るといふのが、その法門の味いであります。それから十方世界のこと、どちらの世界のことも盧舎那仏の本願力の故に、一切世界を我が身とせられるところの廣大無辺なる仏様の本願力の故に、一切衆生のところ、一切衆生の善根、その他一切衆生の性を知る。一切衆生一人一人の性質がどうであるといふことを知つて、一切の縁覚、菩薩、諸仏、自分ひとりさとりをひらいている人、或は一切衆生と共にさとりたいという人、一切衆生のさとりをひらいて下さるといふ仏様、そういう方が、そのしずかな心が自在に働く、そういう法門を夫々分別してわかる、それが今の瞿夷女が味つている法門の味いであるところ答えるのであります。

善財は更に、そうなれば大聖よ、無上菩提心、この上も

ないさとのところをおこしてもう久しいことになりませうかとまずねましたに對して、瞿夷女は過去、前生の因縁を物語るのであります。

前生物話

その因縁物語というのが仲々味が深い、というのは男女の問題、男女の結婚問題について、仲々味の深いところで述べられてある、そういうことを感じますのであります。

昔々、勝光明、すぐれた光であります。勝光明と称せられていた時代に妙徳樹須弥山という名のついた王都があつて、すぐれた都であつた。その王様は一切宝主といい、一切の宝のあるじと云われ、仲々正しい王であり、勇ましくあり、又健全な王でありました。その王の太子が増上功德主といわれていた。功德を益々増して行くという意味であります。その太子の顔容が非常にすぐれていて立派な車に乗つて、香牙山に詣つて、立派な樹が一杯はえている立派なところを通つて、色々結構なものを施しをする。ところが一人の母親があつて善現という、善きことが現われるという名で一人の童女、小女をつれて居ります。その童女の名が離垢妙徳という名であります。それは非常に正しく、おごそかで、何ともいへぬすぐれて妙なるすがたである。その顔かたちは他にならぶものない顔容であ

る。齒も口も立派で、そして才能が実にすぐれておりますし、その言論がすぐれてよく、かしこく弁じていくというようなことで、そして慈悲の心をもつて居つて、貪欲、瞋恚、愚痴とか、そういうことが非常にすくない。全くないとは云つてありませんが、非常にすくない。その母と娘とが太子より先だつて、その香牙園に来るのであります。

染愛とその淨化

そうすると増上功德主太子がその娘を見るとすぐ染愛の心を生じ、とありますから、今で云えば恋愛、恋い心がそこに現われて来た。それでその太子がその母親に云われるのであります。

「自分は賢い女を求めて、自分の妻としようと思つて居る。」そうすると母親が娘に向つて云うのであります。「太子様がお前を妃にしようと思つて居るがどうか。」その時娘が云いますには、……ここが六十卷の華嚴と、この八十卷の華嚴と一寸答えがちがうのであります。……六十華嚴を見ますと、娘の答えが「私をあの太子さまの妃にして下さるならば、私は死んでしまいます」。八十華嚴を見ますと「私の心ではこのお方に敬つてつかえようと思つて居ります」と反対になつております。つまりそれは、娘も太子に對して染愛の心がおこつてそう云つたとなつており四十華嚴でも同じことが云つてあつて、心に染愛を生じ

て母親に申しますには「慈愛あるお母さま、私の心ではこのお方に敬つてつかえたいと思つております。若しその思いの通りにならないならば、私は死んでしまいます」と。こういう三つをくらべて見まして、矢つ張り八十巻品、四十巻品の方が本当だろうと思ひます。六十巻品では「私をお方の妃にして下さるようであつたなら、私は死んでしまいます」と、妃になりたくないとなりますのでありますが、そうではなくて、そこは間違つてゐるかと思ひますが、そうではなくて、そこは間違つてゐるかと思ひますが、四十巻品、八十巻品の方が本当でありましよう。つまり太子の方からも染愛の心、娘の方からも染愛の心がおこつて、そこに恋愛結婚にならうとするのであります。

そうすると母親がこれをとめる。「この太子さまは転輪王の相がある。この世の中を一切宰める相がある。そういうお姿である。このお方がそういう王様になられたら、その玉様にふさわしい王女宝という言葉がつかつてあります。玉の玉のような女の宝と書いてありまして、非常に立派なお妃があるということになるだろう。お前はそんなことを云つてはいけない。その時になつたら、お前はこの太子様に、王様になつたお方にお仕えするということが出来なくなるのじやなかるうか。そういう難儀なことになる。そんな心を起してはいけない」とこういうのであります。

を聞いて、その正しいみ法をおうけしているという心をおこしまして、そして太子のところへ行くのであります。

そこをどうお考えになりますか。自然の恋愛の心そのままではなく、その自然の恋愛の心が勝日光如来のみ教えのもととよかされて行くと思ひますか、そういうところからひらかれて来たかと思ひますが、どうでありましようか。つまりただの恋愛結婚というものはあてにならない。初めはよくてもうちにどうなるかわからん。実際の世間の有様はそうであります。だからどうしても、恋愛は恋愛としていいといたしてもそのままではいけません。太子の方からその心があり、娘の方もその心がありますが、恋愛の心が勝日光如来のみ教え、正しいみ教によつてその恋愛の心がよかされてはじめてそこに真実の結婚というものが行われるということになる。

こういう風に、そこは私の勝手な解釈になりますけれども、どうもそういうふうにはこは受け取れるのであります。

今の娘は、太子のところに行つて合掌して、自分は智慧や才や言論にも達して、心はチャンとやたらに変わらない、正しい心で、また清い心で、真直ぐで滑らかで、けがれがなく、貪りや、瞋りや、愚痴とかがなく、まつすぐなきよしい心をもつて諸々の衆生をたすけて行くという主意を述べ

母親は娘の恋愛の心を否定するのであります。

勝日光如来

その時に香牙園の外に一つの道場があつて、その名を法雲光といつて、法の雲のひかりと名づけて、そこに勝日光如来という仏様が、勝日光でありますから太陽の光よりももう少し勝れた光の仏様さま、そういうすぐれた仏様が世に出で給うて、無上のさとりをひらいておいでになるという事実が一方にある。

その時に今の娘は夢にその如来のおからだを見た。夢を見た。その夢の中に、その如来のお身体があらわれるという夢を見た。その夢がさめますと空中に天があつて、天人であります。これが告げて

「あなたが夢に見たのは勝日光仏という仏様である。その仏様は今さとりをおひらきになつてから七日である。今道場にいらつしやつて菩薩やその他沢山の衆に取りまがれておいでになる」

そういう天の声が聞えた。これは前にも申しましたように、天の声が聞えたというのは、自分の心の奥の一番底の心のひびきが聞えてきたところ解釈してよいと思ひるのであります。それだから、今の娘はそういう夢を見てそういう声を心の奥底にきいた。

それから、そういう沢山の衆が仏様を見て、正しいみ法

をいつて、太子の心を賞めたたえて、そしてこの立派な姿は必ずのちには転輪王になられるだろう、こういうことを言うのであります。

そこに矢つ張りもう娘の方は、仏のお心が身にしてみえて仏のお心というものが、知慧弁才にたけて、心がきよらか、というようなことは、自分が自慢するのではなくて、仏の心が何時の間にか自分の心にしみて来ている。それをいうのであらうと思ひます。そして今の太子を拜んで「太子は必ず立派な王様におなになります」というのであります。

太子の方はそれに答えて、娘の父親、母親のことを問われる。そして娘が他の人に属するかどうか、つまりもう他の人と婚約でもあるかとたずね、自分の心持を述べて、菩提心、無上菩提の心を起して、無量劫、大変永い間求めて決して疲れた怠屈したというような心を起ささないという決心をのべる。

正法帰依の結婚

そうだから娘がすでに勝日光如来の正法に帰依するといふ心をおこしている。太子もまた大いに修行してその仏様の道をきくと、こういう心持になる。つまり今夫婦にならうとして、それがつまりただの恋愛をもつて結びつけられるのではなくて、成る程恋愛の心はあるが、その心が勝日光

如來に二人ともかされて、そしてもろともにまことの道に進むというところに一諸になろうと、こういうことになってきたと、こういうふうには感じられるのであります。

そうすると娘の母親が、

「この娘は太子様と同じ日に産まれました。しかもその生れ方は蓮華の中から生まれまして」ということを詳しく述べまして、

「この娘は玉女宝ともいふべきものであります。玉のような女、宝の女というよなものがございます。世間には滅多にない女でございます。それでどうぞ太子様、私の娘を受け納れて下さいませ」

と、母親がたのむということになるのであります。

そうすると太子の心持も変つて来まして、前には染愛の心をおこして、この娘と一緒にやつてやろうと、このように考へていたが、今度は仲々きびしいのであります。

自分は無上菩提の心をおこしている。そうなつてくると未来永遠に布施をおこなう。自分の持つて一切の国でも、自分の城でも妻や子でも、自分の手や足、自分の頭や目、自分の脳髓まで、みんな施しをするという決心をしていくと、このべるのであります。

こうなつてくると、ただ恋愛の気持で娘を貰うという気

人があつたならば喜んで自分は施しをいたします。……私は非常な富を求めたのでもございません。或は自分の色々の欲のたのしみをむさぼるのでもございません。ただどうぞ太子様と御一緒にまことの修行をして、そして太子様の妻となりたいと思つているのでございますと云つて、それから自分の夢をのべます。

正夢の物語

私は昨夜夢に勝日光如來のおさとりの夢を見ました。菩提樹の下に座しておさとりをひらいていらつしやいます。そして沢山の人がそれを取りまいていられます。夢の中でその仏様を見たのであります。その仏様は手で私の頭をなでて下さいました。私は夢がさめて非常に嬉しく、おどろいたつほど嬉しゅうございました。それだからどうぞ一諸に勝日光如來を供養いたしましょう、ということになるのであります。

そこで太子は非常に喜んで仏様にあいいたいとなるのであります。すると母親は太子のために歌うようにして云うのであります。「この娘は仲々すぐれております。この玉女宝は、功德をもつて自分の身を飾ります。そして仏様のいましめをまもつて決して放逸のことをいたしません。知慧や色々の功德がもつとも勝れていてならぶものがございませぬ。この娘の心は立派な蓮華から生まれた娘の心であ

持とは非常にことなつているのであります。この頭目、脳髓を施すとは、これはよくお経に出て来ますが、これはどういうことであるかとよく考へて見ますのであります。これは、これは矢つぱり自分の頭の働きをすっかり衆生のために施す。自分の目の働きも、自分の脳髓に思う心の働きもみんな衆生のために想い、衆生のために見るといふように、衆生のためにすつかり捧げると、こういう意味であります。それだから自分は慈悲の心をおこして内外の一切を捨てる、自分に属する外物、自分の心まで一切捨てる。そして自分の所へ来て、施しを求めらば、妻子も眷属も、在家も出家も、皆施すが、そういう場合に汝はさまたげをしてはなりません。そういう決心がつくならば自分はおなたを自分の妃として受け納れると、こういう決心を述べます。そうすると娘の方でも決心が出来ているのであります。一切の時に於いて、たとい地獄の火が私の身を焼いても、もしよく私を納れて下さるならば、自分は甘んじてその地獄の苦しみを受けます。自分のこの身体、このからだを微塵に砕かれるということになつても、私を太子さまの妃としてお納れになるならば、自分は甘んじてその地獄の苦しみをうけます。そして無量無数劫、いつまでもいつまでも永い間、菩薩の道を修行して、そして自分のところへ来る

ります。世間のいろいろのたのしみをたのしみとして居りませぬ。無上のさとりを喜びといたして居ります。」と色々に自分の娘をほめて、母親が証明したかたちであります。そこで太子は香牙園を出られて、今の勝日光如來の道場へ行かれる。そしてお経を説かれるのを聞かれて、そして色々の三昧の境地がひらかれたというのであります。心の奥深くしずめることが出来るようになったというのであります。その三昧といへば、色々の仏様を見る三昧、それから一切の衆生を照らす三昧、このような色々の三昧がひらかれたというのであります。

未完

雑詩

陶淵明

地に落ちては兄弟なり
何ぞ骨肉の親のみに必らん
歡を得れば、当に樂しみを作すべし
斗酒もて比隣を聚めん

盛年、重ねて来らず
一日、再び晨なり難し
時の及にぞ、当に勉勵へき
歲月は人を待たず

非情の情

仏教では非情とは有情に対し木石に類するものであるが、この情というのは、私情の意、非情とは、私情を離れた真情の意です。世間に情のこまかな人を情が厚いと愛し親しまれるのですが、主情的に自身の情のみを頼つて事を決め行動する。情に執られ平静に物が見られぬため、その時その時の情によつて味方になり敵にもなり、相手の全体をつかみ信じる事が出来難い。それで時に惑い、時に苦しむのです。かくいう私も半生それで悩んだことでした。

明治の文豪、漱石も、そうした人情を超えて淡々とありたいと念じたようです。彼の「草枕」の書き出しにも

「智に傾けば角が立つ、情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ」

といい、又

「恋は美しかる、孝も美しかる……然し自身が其局に当れば利害の旋風に捲き込まれて……目は眩んで仕舞う。

従つて、どこに詩があるか自身には解しかねる。これがわかるためには、わかる丈の余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は見えて面

白い。小説も見て面白い……小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。見たり、読んだりする間だけ詩人である。……苦しんだり、怒ったり……泣いたり、人の世のつきものだ。余も三十年の間それを仕通して飽き／＼した。」

ともいつているのです。

わが 窪田穂翁も、生活は事務的に事を処理して行くことだが、それだけでは物足りないので無駄な非事務的なことを楽しんで求める。……といった意味のことを云つていられる。事務的とは仕事の意です。世間は作業的に私情を雑えずにやると、ごた／＼せずに行けるが、それだけでは冷灰木石の生き方で、味がなく、何か潤いが欲しくなる。然し、情が加わると特に職場でも付合いても、必ず加担したり、反目したりして、和、即ち協同を害ねる。男性間もそうである、が特に主情的傾向をもつ女性には多いようです。大抵の私語はそのようです。

推古時代も、公務上にそれがあつたと見え、聖徳太子は

十七憲法で、

「私を脊ぎ、公に向うは、これ臣の道なり」

と示していられることです。元々、公という文字はハの下にムを書く、ムは私の傍で、手釣で利を懐へ掻き込む意の象形です。ハはそれを左右に払い退ける象形です。公務も、職場も、又世渡りも同じです。私情を交えらると必ず公正を失い、過ちを起し、ごたごたを起す。では外の付合は公でやり、家庭内では私情でも思えるが、人間には限度があつて、家庭でも限度を越すとごたつくのです。

それで私は、非情の情ということを申したいのです。情は盲目だという。特に子を思う親情はそのようです。先日、園児の社会成熟度のテストを各母親に記入して貰つたところ、世にあるまじき高い指数の出るのが多く、子に対する私情から、各々子を買いかぶつてゐるのを見たことです。私情のため、第三者となり正しい観察が出来なかつたのでしよう。

真の情は、非情の情です。それを本当に行えるのは人生の根柢に達しないと難しいでしょうが、私情耽愛は盲目的で、却つて真の情が屈かないものです。

仏教では愛とは言わず、慈悲と云い、愛は情の反面とき

れるのです。歎異鈔にも「いかにいとおし不便と思ふとも私情では助けられぬ」といい、又、「親鸞は父母孝養のために一遍も念仏申したことはない」といつて居られるし、又「自身はかく信じるが、これを取つて信じようと、信じまいと、面々のお勝手である」と突き放してもいられる。突き放されて、初めて真の情が判るものです。情を超えた情、それを非情と今いつたのです。

作歌上でも情感に溺れ甘えると歌にならない。客観的態度で対せよ、と言われることです。

幸福観と人生観

誰しも人生を幸福にありたいと希うことは同じだと思ふのです。だがその幸福観が最近、我々の時代と變つてきたようです。

幸福の基礎をなすものは其の人の人生観でしょうが、それが著しく變つて来たことです。物的経済的に豊かな生活、それに身体の健康ということ、これは今も昔も同じことですが、それが著しく積極的になり合理化されて来たことです。身体が健康で社会に活動して物的に豊かな生活を打ち樹てることを多くの人が人生目的としてゐることで

特に平和社会となり物質が豊かに生産され、食糧が意の

ままになり、体育が盛んになつて、青小年の体位が著しく進み、それによつて体力的ともいふべき逞ましい意氣、それから湧きくる欲求衝動も可なり激しいようです。それに近代教育は自己を抑制統一して人格的活動にということにやや欠けた感があり、自由に個性を伸ばすという傾向が強いのです。それで近頃青少年間で起つた事件にも、通りがかりに肩がふれたからといつて、いきなりナイフで刺すといつたこと、学生がハイヤーの運転手を殺して車を奪つたなど、屢々報じられている。これは統一的判断の欠けた一種の衝動ともいえる行為で、情緒が歪んでいることが見られるのです。之も学校教育として科学的な教科たる生物学で培われた処の生物的人生觀が下地となつた動物的行動でさした目的もないのに、直ぐさま体力的凶悪手段に出るといふ生物的人生觀の産物でないかと思ふんです。

自我の尊重、個性の伸長といつた思潮から、どんな性格でも自分自身から自然に芽ばえたものが尊いものだと考え、それが社会に存在が許せるものだと考え、あまり己れに對し疑問を懐かず、内省をしない所から発するのだと思ふのです。そして性格、そして行動を社会が容れないで斥けると、けしからんと反撃に出る。

またそうした性格からの欲求が社会生活上許されないと欲求不満をもち、ノイローゼを起す。それらを社会の罪とし

心の底にのこるお言葉

ながくきびしい冬を病床にたえた身には、みちのくの春はたのしい。夜中にめざめてきく春雨の雫の音は、この上なくなつたかしく感ぜられる。心臓の鼓動が時を刻み、秒を讀んで死に近づいているなどと、ボンヤリ考へていると、それからそれと往時がしのばれてならない。

私は初めて近角常觀先生の御法話を拝聴したのは、大正四年、仙台二高在学中であつた。爾來幾度聴聞したか数えきれない。近角先生のお育は一種独特で、しぶいというかさびのきいた、しかし何となくまるみのある、そして内容とピッタリであたたかみがあり、非常に魅力的であつた。お話の御趣旨は、毎号の慈光誌に連載されてある。

又白井成允先生が自照誌に「真実道」という題で、三十九年十二月号より三十九年三月号まで、二十四回に亘り開法のおもいでを御執筆になつておられる中で、近角先生のお話に出る譬喩など、詳細に御記録してある。特に御講演後の座談会の模様を誠に見事に活写しておられる。おそれなく何処の座談会におかれても同様の御容子であつたことと

自らが責任を負わないという傾向も強いのです。そして又欲求不満やノイローゼが科学的方法による臨床心理学や精神衛生によつて凡て解明し治し得るといつていることもやや科学にのぼせた感がするのです。

そして科学的思潮から、宗教などは弱者の泣き言か自慰に過ぎないという風に思う向きが多いのです。一般の幸福感といふものは或る一つの欲求の遂げ得た一つのピークに立つた一刹那感です。欲望の山は涯しがたない。その涯しがないことが科学文化を進まずんだともいふのです。然し眞の人間文化は進むのみを知つて退くを忘れたり、健康をのみ知つて病を忘れたり、生きることに急で死を忘れては片手落ちだと思ふ。又健康の連続、楽しみの連続には幸福感がなく、樂は苦により。幸は不幸によつて知られるものです。

眞の幸福はかく社会に立つて鬭争し克ち得た一刹那といつたものではなく、内的に己を知り、足るを知つての喜び、それだと私は思ふのです。富にあつてなお心の満たない人は貧者で不幸な人です。眞の幸福は己を知り、足るを知るところから人にも感謝をもつ、その賜物として恵まれるものでもあるのです。

以上、「短歌草原、券頭言。」

福田鉄雄

思われる。お話しにだんだん熱が入つてくると、膝をのりだされ、右手を上げしく上下され、まるでお慈悲の塊となつて座にある人々に迫つてくるようである。

恍惚としてお話を聞き終つて、さて自分に何かわかつたかと反省すれば、なにもわかつていない。その時先生はポツリと「信仰問題は心の問題ですから」と仰せられた。そのときのおすがたは、和顔愛語そのものであつた。このお言葉は私が最初参じた座談会以後、幾度も承つたように記憶している。今更申すまでもなく、先生の御文章を拝読すれば、いつも心の問題のみのお話である。それなのにどうしてこのお言葉が印象深く脳裡に残っているのか、理由は判然としない。

多分当時私は仏法のお話を聞けば、品行方正、學術優等になり、他人の評判がよくなるとか、なにか神秘的な力が得られるとか、金持ちになるとか、或は身体が健康になるとか、丁度昨今の新興宗教の説くところの世俗的なご利益でも期待していたのかも知れない。それを端的に「心の問題ですよ」とお示し下されたので、何か強くうたれるも

のがあつたためかと思う。

次は島地大等先生のお言葉である。先生が御住持をして
おられた盛岡の願教寺において、明治から大正にかけ、毎
年夏季仏教講習会をお開きになつた。私が初めて郷里盛岡
のこの講習会を聴講したのはたしか大正五年の夏で、講本
は歎異鈔であつた。

第一章の御講話で先生は

「……往生をばとぐるなりと信じて、と申すことは、阿
弥陀様のお慈悲をいただくことにより、生きるというこ
とと、死の問題の解決、即ち人生問題の解決が出来る
と信じて、ということでありませう」
という意味のお言葉を仰せられたと記憶している。

次もやはり大正年間のことである。私は大阪で、富士川
游先生の歎異鈔の御講義を拜聴した。

第十三章の「……本願をうたがう善悪の宿業をこころえ
ざるなり……」の御文の宿業の御解釈に、先生は次のよう
に仰せられた。

「親鸞聖人のお説きなされた宿業とは、これまで長い間
の自分の行為の総計であつて、道徳的に深く自己を反省
して、自分でその責任を負わねばならぬと痛感し、心の

業

人は兎角、貧乏したり悲しい事に逢うたりする「不運」
のことを「業で」とあるという。そうして、金にも恵まれ、
悲しい事にも逢わず、やや「幸運」であれば、それをよろ
こんで「業」ではないように思う。

然し、私は一体、毎日々々を何を考え、何を為して生き
ているのであろうか？

幸運でありたい、仕合せでありたいと日夜そればかりを
願ひ、祈り、求めてアクセクし、年命は日夜に去つてもそ
れは思わず、一刻一刹那も虚仮不実に充ちていても、それ
は恐れないのが私ではありませぬか。

一体、願ひ求めているその「仕合せ」とはどういうもの
であらうか？ラクがしたい、好かれたい、勝ちたい、威張
りたい……等々の我慢が叶うことを仕合せと思ひ込んでい
るのではないか。

ところが、なかなかラクが出来ない、好いて貰われな
い、威張られない、勝たれない。そこで、「思うようにな
らぬ世の中、苦しい人世だ」と、毎日々々愚痴、に泣く。
時にはよろこべて、愚痴ではないと思う日もあるけれど、

上にとても地獄は一定すみかぞかしとあらわれるもので
ありまして、世間でいう運命とか宿命とかいう責任のな
いあきらめの言葉とはちがうのであります」と。

以上三先生のお言葉は、すべて私が仏法のお話、即ち親
鸞聖人の御教のご法話の聞き初めの頃承つたものである。

お言葉の意味はわかりきつたものの如く思われるが、言
葉は兎角誤解され易い。三先生は深い御体験の上更に幾度
も繰り返えし心で味わわれた上で仰せられたお言葉であ
る。

それを当時思想的に格別未熟であつた私は、先生方の意
味される内容とはちがつた意味でうけとめていたのかも知
れない。或はお言葉を聞きがちがえて承つておるかもわか
らない。この辺のところは頗るあやしげである。ただ半世紀
に近い間、以上申し上げたようなお言葉を承つたと心得
て、今日に至つておる。そしてながい間ときどきあたため
ているうちに、なんとなくそれなりに成長もし、私をお導
き下さつた御恩のありがたさは忘れられない。

松村繁雄

それは、我慢がやや叶うたと思う満足であつて、そのよう
なよろこびは忽ちに雲散霧消するものであり、それも亦、
愚痴と我慢の裏側でしかない。

そうしているうちに、昨日も過ぎ今日も暮れ、わが命は
燃えるローソクのように、愚痴に燃え、愚痴に縮み、愚痴
の中に刻々と消えて行く。それが私である。

貧乏も辛い、悲しい事に逢うのも辛い。それももとより
耐え難い「業」ではあろうけれども、み仏が私をみそなわ
して「悪業よ」といとおしめ給うのは、そのような貧乏や
不遇の事ではなく、私の性根の問題でありました。

幸運であれ、仕合せであれと願ひ求める我慢のために、
年命は日夜に去つても、それを恐れず、三毒の煩惱に狂い
廻つてもそれは思わず、我は善し、人は悪しと思ひ込んで
毎日々々を愚痴と闇の中に送り迎えている私。

そのような悪、そのような愚は、改めたいと思つても、
どうしてもその愚と悪を改めることが出来ないで、百年生
きても千年生きても、それを繰り返すより外に道のないの
が私。その、して見ようのない愚と悪の私を、仏はかねて

知らしめられて「悪業のお前よ」と仰せられるのであります。

ラツキヨウは、剥いても、剥いても皮であります。然るに、剥いたら中から真実が出るように思い、おのれが皮ばかりとはどうしても自覚ようしない私。

たまたま念仏して「われは愚だ、悪だ」と思われることがあると、その途端にすぐに又、「愚と気がついているから我は賢、悪と気がついているから我は善、念仏するから我はよき信者だ」と、又しても思い上つてしまふ私。

おのれが賢であるから、他人は愚に見え、おのれが善であるから他人は悪人に見え、おのれが念仏者であるから他人は救われ難い迷盲に見え、そこで、どこまでも邪見と驕慢の火を燃やしておのれを焼き、人を焼き、暴又暴、迷又迷を繰り返す私。

その愚、その悪、その迷いをどうしても離れることが出来ないで、昨日も今日も又明日も、苦しみ悶えねばならぬのが私。そこに「何れの行も及び難き」「地獄必定」の私の姿があります。

然るに、仏法を聞けば、悪人が善人になられると思ひ、念仏すれば地獄より逼り出て極楽に行けると思ひ、苦を逃れてラクになれると思ひ、善人になりたいために仏法を聞き、ラクになりたいために念仏をする。それが又、私の今

今もいま、玉のみ声のかかるなり、さて淋しかりう悲しかりうと

池山先生の「たのまるるただ念仏のわれにあり、さるべき業はさもあらばあれ」の御歌が胸にこたえます。一緒しているぞ、とのマコト、それが「たのまるるただ念仏」であります。私が念仏して善人になるのではなく、苦をのがれるのではなく、善人になれない、苦の逃れられない身であります。その私の悪業のために、一緒して下さるもの、それがみ仏の念仏であります。

今日も又渡らんかなやみ仏の
み名を称えて業の火の河

☆ ☆ ☆

法 信 抄

直 方 市 吉 田 延 世

只今「慈光」落掌、読了したところで、読後の感をそこはかとなく書きます……。

福島先生の稿の終りのところで、ロシヤ婦人と結婚なさ

日の姿であります。

ラツキヨウであることは自覚ようせずに、皮を剥いて真実を出そうと思ひ、悪性であることは自覚ようせずに、仏法を聞いて善人になろうと思ふ。「心得たというは心得ぬなり」という誠めはあつても、又しても、心得たつもりになりたいたい私である。そこに氷劫に流転せねばならぬ私の「悪業」の姿がありました。

その私に「駄目よ」と教えて下さり、駄目な私と一諸に悲しんで下さるもの、それがみ仏の真実であります。

「仏かねて知らしめられて、煩惱具足のお前よ」と仰せられることなれば、「他力の悲願はかくの如き、泣くより外に道のない私のためと知られて、往生はたのもしく覚えさせて貰うばかり」であります。

ただひとり泣くよりほかに道ぞなき、わがためにこそみだの涙は

この悲しい悪業は誰に分ち譲ることも出来ぬ、私独りが背負うて行かねばならぬ私の「業」でありました。その上に思ふことも、為すこともすべて無常であつて、今日嬉しいと思ひ、可憐いと思ひ、いとおいしいと思ふ事も、明日はこの身と共に消える、どうしようもない淋しい私であります。その淋しい私に、淋しかりう、との御涙、それが仏の真実でありました。

れた登張竹風翁の御長男は日露戦争の時自殺せられた、とありますことですが、それにつきまして、求道会館での近角あ先生の御講話を思い出しました。

それは第一次欧州戦争の日、青島で日独戦をいたしました。たが、その時、ドイツ人と結婚していた人が、あわれ自殺寸前に、求道会館の御縁がひらけて、自殺せずに救われた御講話がありました。

「かくの如くドイツ人と結婚していた人が、日独戦争となり、外界の障害に苦悩する、その心をあわれみましますみ仏の大悲にましますこと、外界がよくなることに救いを求めるのでなく、かゝる苦しい心を救う仏法なること、内に求めることである」ことを深く感じました。

「外界の非をとがめ、煩悶し責めるとなると、社会問題、共産革命になる……云々」と、只今も想い起すことあります。

× × ×

名もしれぬ樹の花咲きて葉の光る兵田の野山五月の天地

枯れたかと思つた裸木よく見れば春におくれて芽ぶき始め

仏語を聞くところ

花田正夫

法然聖人の御歌に

月影のいたらぬ里はなけれども

眺むる人の心にぞすむ

とあります。阿弥陀仏の徳光は、尽十方無碍の光明を放たれて、遠い昔から人生を到らぬ隅なく照らして下さつてゐるのに、その真意に気づく人のまれなことを悲しまれた歌であります。

省みますれば、我々は日本に生れた者の有難さに、生れぬさきから仏法のおしえの中にすでにおかれていると申せます。

仏塔、仏閣はもとよりのこと、仏像仏画は随所に見られ、更に生活の中に「袖振り合うも多生の縁」とか「おかげさま」とか、「喧嘩両成敗」とか、「自業自得、身から出た錆」等々と、無数に教がとけこんでいるのであります。その中でも南無阿弥陀仏の念仏の普及は、凡そ日本人であつて知らぬ人はないと申してよからうと思ひます。

仏法にはすでにふれているのであります。仏語は無数に

なくなるという謙虚さに帰らされる時、自身は白紙になつて、心をからにして向うの声を聞く、そこに外国の思想と言葉とが体得され始めるのであります。

次には同じ言葉の通じる友人の間においても、真実の理解、同情ということは至難であります。ツルゲネフの詩に

「君は泣いた、私の不幸に。」

君の同情が身に染みて、私も泣いた。

だが君も、

自分の不幸に泣いたのではないか。

それをただ、

私のうちに見ただけではないか？」

とあります。有島武郎氏の告白に、

「聖者の愛はおしみなく与える。然しわたしの愛はおしみなくうばうものでしかない。

小鳥を愛するというのが、小鳥の自由を奪つて、小さい籠に閉じこめて、餌と水を与えて、立派に愛しているつもりでいる。そんな愛しか出来ぬ」とあります。

どちらも、その程度の差はあつても、自己中心の尺度を出られないことを知らされます。ここにも、人間同志で同

身辺にとどけられているのであります。

「道は開かれたり、閉ざされたるは汝自身の眼なり」

とゲーテは久遠の真実なるものに向つて、自身の盲者であることを表白して居ります。

我々もまた、仏語を聞き、仏語を読む時に、先ず自身の耳や目が、聾であるか盲であるかをかえりみなければなりません。

ここで広大無辺のさとり境界にいられる仏陀のことはさておいて、同じ人間同志でしかも言葉を異にする者同志のことについて、ゲーテは、

「外国のものを翻訳する時には、どうしても訳せないというところまで行き詰らなければならぬ。そこで初めて外国の思想と言葉とを体得することが出来る」と述べております。

長い間の異つた伝統と歴史をもつた外国の言葉を、自国流に判断したのでは、本来の意味を知ることが出来ません。そこに「どうしても訳せない」という行き詰りがあります。その行き詰りにあつて、自身の持物の一切が役立た

情するとか、同情をして貰うということにも行き詰りがあるのであります。

まして、広大無辺の仏智と、深くして底のない大悲心からあふれ出る仏語にふれましては、我々はすっかり盲者であり、聾者であり、死骸同様の無感覺者であることを省みさせられます。

ここに仏法を学ぶに、始めにして同時に終りとも申せることは、自分自身の愚悪さを知ることとあります。そこに御法の門は開かれ、光明は生き／＼と輝くのであります。

浄土宗としての開宗の偉業を遂げられた道綽禪師は「五弱ごじやく面牆」とて、五つの塵が前を覆つて眼はつぶれ、壁に顔をぶつつけて身動きも出来ぬ身であると告白していられます。

善導大師は「自身は現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし」と表白されています。

世間から小釈迦とたたえられた源信僧都は「余が如き頑魯がんろの者」「極重悪人」とも仰せられ、更に往生要集では

「下品の三生、あに我等が分に非ずや」と仰せになつていられます。

「よき人」法然上人は、観經の下品の人の救済を説かれたところで「この品、最も要なり。すこぶぬ我等が分に相当せり」と述べられ、常に「愚痴の法然、十悪の法然房」と仰言つていられました。

親鸞聖人は「愚禿親鸞」、「地獄は一定すみか」と常に名告られたことは誰しもよく知るところであります。

さてここに、仏光は昭々として四方を照らし、くまなく輝いていても、悲しい哉、身はすでに盲者であり、聾者であるといよ／＼知らされるのであります。

そこには一切の救いの道は閉ざされて、孤立無援のひとりぼっち、待ちも待たれもせぬ身がはてしない荒野にさするうばかりであります。

この三界孤独の身に、このことをかねてしろしめされての大悲の声がひびくのであります。蓮如上人も「往生はひとりしのぎの法なり」と述べられています。が、独生独死、独去独來の身にこそひびく、如來招喚のみ声！他方の悲願はかくの如きの我等がためと知らされます。

畏友、北岡さんの句に

紅葉せずこのまま散るか散り行くか

という一句があります。長年池山先生はじめ、有縁のよき人々に導かれ、戦場に四年も出て、しかも無常もわからず、罪悪にも徹し得ず、あわれ人生五十もすでに過ぎた日の述懐でありました。

又波岡茂輝氏の歌に

何というぐうたらわれぞ死にのはてまで

このままで動かざぬ気が

とありますが、この身こそ、仏陀照鑑の身であります。

私はいつも思うております。たとえば「歎異鈔」を読むにしましても、自分は読めばわかぬとか、よいことも出来ると思っている間は、鈔の言葉の片言隻句も身にひびいて参りません。それに反して、智目無く、行足を欠く身、いづれの行も及び難き身と知らされる時、鈔の全体が、この身一人に傾倒される大悲の声と身にしみるのであります。

すくわれぬ身にしみわたる御名の声 読人不知

不思議な杖

水谷 美津子

或日私は一本の杖を貰つた

苦しみを喜びに変えぬ魔法の杖！

歩くことも出来なくなつた私のために

〃これを持つてお歩き〃と

そつて握らせて下さつたお念仏の杖

喜ぶ資格は私にはもうないと思つていたのに

それが喜びなのだよと知らせるために

遠いはるかな願いをこめて送つて下さつたお念仏の杖

「杖を下さい」と願いはしなかつたのに

立ち止つてしまつた身動きの出来なくなつた私を

何処かで見つめていて下さつたのですね

苦しみがはじまろうとする時

杖はもうたしかに私の手の中にあつて

私を歩かせてくれる

沼にまみれても、炎に焼かれても

しつかりと私を引っぱつて行つてくれる私の杖
光る杖！お念仏よ！

時々私は立ち止つて、遠いはるかなお方達を思う

はかり知れない願をこめて、私のために杖を作つて下さつたお方！杖があるのだよと教えて下さつたお方！

私も杖を貰つて歩いたのだよとお話をして下さつたお方！

「同じなのです、私も歩いてよいのですね」と見上げて聞けば、

「そうだよ、同じなんだよ」とやさしく見つめて下さるあなた！

すべてのものを光にかえて

私を歩かせてくれる杖！

不思議の杖！お念仏よ！



あとがき

和歌山市道場町の蘭田香敷様から、個人雑志「静炬」の惠贈をうけました。その中に明治三十四年のベルリンでの花祭りの写真がありました。これは近角、池山の両先生をはじめ、蘭田、姉崎、巖谷、松本、美濃部諸氏の十八人の当時の留學生が中心になつて、欧州で初めての花祭りを催された記念のものであります。この花祭りは今日もおおベルリンで毎年行われて居り、ことに最近では、ベルリン浄土真宗会も出来、池山先生の独訳歎異抄が読まれている由であります。これは数年前、山田宰さんがベルリン留學中に池山先生の独訳歎異抄をテキストとしてドイツの人々に談話されたことから、引續いては念仏の御縁であります。

「植えて見よ、花の育たぬ里はなし」の一句は、かつて真田増丸師から聞いた句であります。あたらしく思い浮びます。又、榭原師が来泊された日、池山先生の建碑のことで、寿夫様をたずね御相談、をしました。その時承りますと東京の書店から、池山先生の独訳歎異抄を再版させてくれるようとの申出があり、近く出版される由であります。この書が秋の一道会に間にあえばと祈念して居ります。

又六高時代からの友で、然も念仏につながらる豊中市の江口克夫君の奥さんが突然来庵、和裁教授ひとすじに生き、夫君と共に念仏の徳を讃仰していられます様子を承り、嬉しいことであります。

又菅瀬芳英師と深い御縁をもたれた西本清三氏が岡山から来訪下され、芳英和上や、福岡氏のことなど承りました。

四十八願講話

福島政雄著

(内容)

- 一、光顔魏々の御仏
- 二、久遠永劫の因縁
- 三、四十八の発願
- 四、四十八願の延書

先生自序、大経はたとえば大きな鐘のようなものであります。大きくたたけば大きく響き、小さくたたけば小さくひびきます。私には大きくたたき力などありません、私想応のたたき方を致しますだけであります。……これは五悪段の巻と相応して私が仏の智慧に照され慈悲に温められた心持を述べましたものであります。

発行 京都市下京区花屋町、西洞院、永田文昌堂
振替 京都九三六番。 定価二五〇円、送料五〇円。

御案内

○ 一道会館法話会。

- 第一日曜 歎異抄
- 第二日曜 正信偈
- 第三日曜 無題

午後一時半。

市電新郊通り一丁目下車、東二丁半

○ 市内昭和区小桜町、教西寺、法話会。

毎月二十四日 午前・午後。

市電御器所通り下車。桜花学園東。

定価 一部 二十五円(送共)

半年 百五十円(送共)

一年 三百円(送共)

名古屋市南区駈上町三ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番